

銀海

目次

二、三職業に見られた眼疾状について：
（その1） 鈴木昭弘……1

犬の目：……岡山脩夫……5

銀海・人・とき・ところ(8)：宇山安夫……8

白内障の歴史から(その10)：福島義一……13



15号

1965, 8月

■ 銀 海

人

とき

ところ

■ 宇 山 安 夫

まえことば

- この人物素描は、私がかねてから所蔵する人物カードの史料と新しく調査している史料とに基いて、アイウエオ順にのせているものである。
- 未調査のものは、順序にかかわらず調べが済むのを待ってのせることにした。正誤もまた順序によらない。
- 掲載の対象は、私一人で調査の及び得る範囲に限られるのも止むを得ない。特に家系譜に関連のある場合を除き、一応終戦前に世に出た医人にとどめたい。採扱の当否は全て私の責任である。
- この仕事は、一人の老人の懐古癖から出発した、さきやかな労作であるから、調査浅れ、考証の不備、杜撰、不躰など多々あることと思うのであるが、大方の寛容と進んでのご協力をお願いしたい。

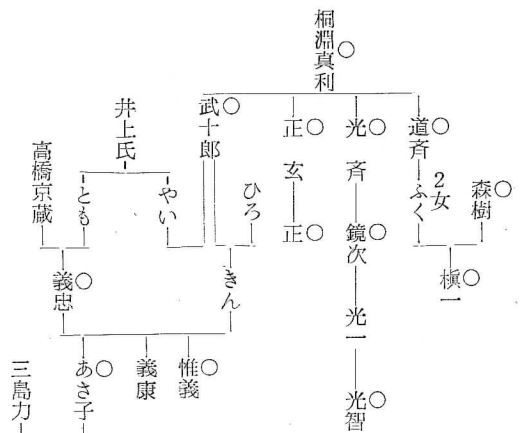
(本文中敬称省略 無断転載無用)
連絡先：伊丹市緑ヶ丘6の24

(1) 151 桐淵眼科一門

幕末より明治にかけて、都下屈指の眼科病院として知られた桐淵眼科の始祖は、上州藤岡（群馬県）の人で、桐淵真利といった。この眼科医に、道斉、光斉、武十郎、正玄らの兄弟が生まれたが、いずれも眼科医となり、そのまた子孫も、夫々眼科を継承して、一門が各地に繁栄して現在に至った。

家系の一部に調査の及びにくいものもあるが、大部分のものは明らかになったので、以下系譜を追うて、一門の人々を素描いたしたい。

桐淵眼科一門の系譜



○印は眼科医

(2) 152 桐 淵 道 斉

(天保5～大正9、1834～1920)

上州藤岡で生れ、弘化3年(1846)、14才のときから嘉永元年(1848)まで、当時、全国にその名を知られた、信州諏訪藩の御眼医師として、高嶽で抱えられていた3代目竹内新八郎について眼科を学んだ。同門に鮎沢周禎(現在諏訪市の眼科医鮎沢要の先祖)などが居った。

信州の修業を終えて上州へ帰り、万延元年(1860)まで、父の桐淵真利について修業した。文久3年(1863)になって、志を立てて江戸へ出府し、旧津山藩主に高嶽で仕え、次第に都下で名声を博してきた。明治4年になって、京橋北横町に眼科を開いたが、文字通り門前市をなして流行した。上京当時は、東大の⑧ Schultze や Scriba などの眼科を機会あるごとに見学し、後には河本教授にも師事した。明治30年、日眼学会の創立さ

れたときには、その世話人ともなったが、大正9年9月17日、心臓衰弱にて、87才の生涯を終えた。遺骨は、郷里藤岡市竜源寺に葬られた。法名天寿院保利道斎居士。

(3) **桐淵森樹**は、道斎の2女ふくに迎えた養子で、済生学舎を出て明治31年10月医術開業試験に合格して医師となり、埼玉県川口市で桐淵眼科を続けたが、晩年は、東京都田園調布の長男楨一の所で余生を送り、昭和22年1月18日世を去った。

(4) **153 桐淵楨一**
(明治44.3.12、1911生)

森樹の長男で、昭和10年日本医大を卒業し、眼科に入局して中村康教授に師事した。支那事変には北支石家荘診療班員として活躍した。戦後、三菱重工東京病院眼科医長となり、次いで同副院長として現在に至った。東京都田園調布3に住む。

(5) **154 桐淵光斉**
(天保7～明治28.9.15、1836～1895)

桐淵眼科の創始者道斎の実弟である。東大卒業の医学士で、眼科を修め、のち下谷練堀町に私塾揆雲堂を開き、眼科の診療と、医師の教育に力を尽した。桐淵眼科の名は、既にその頃都下に知れ渡ったが、養子桐淵鏡次の代になって、その名声は一段と喧伝された。



(6) **155 桐淵鏡次**
(明治3.6.15～昭和6.3.5、1870～1931)

沼津で生る。旧姓を奈佐といい、桐淵光斉の養子となって桐淵姓を嗣いだ。独逸協会、一高を経て明治27年東大を卒業した。直ちに河本教授に師事して眼科を修め、助手となった。明治30年私費で独逸に留学し、伯林及びライプツヒヒ大学にて研究、同33年帰朝して下谷練堀町の桐淵眼科病院を継承し、益々名声を高めた。明治34年6月「電撃に因する白内障及爾他の眼疾患に就いての実地試験」の論文にて東大の学位を得た。

日眼創立以来の評議員であった。長男光一が医者とならなかったため桐淵眼科は、鏡次の後室の管理となり、東大出身の武田隆(参照)などによって続けられておったが、病院は戦災で消失、再建されぬまま今日に及んだ。

(7) **156 桐淵光智**
(昭和4.11.13、1929生)

桐淵光一の長男、鏡次の孫、昭和28年慶大を卒業し、眼科の植村教授に師事して、昭和35.3.30付「家兎の実験的高血圧症並びに動脈硬化症に於ける網膜中心動脈血圧及び角膜脈波に関する研究」の論文にて慶大の学位を得た。

それから慶大講師を経て、昭和39年夏、新設の国立癌センター眼科部長となった。

(8) **157 桐淵武十郎**
(文久2～大正13.3.24、1862～1924)

医術開業試験に合格して医師となった人である。明治38年頃、岩手県の病院に勤務していたが、自宅が火災に遇ったので先妻の郷里である岡崎に移って眼科を開業した。次いで大正3年、愛知県宝飯郡形原町に移り、更に一女さんの教育の都合で、同郡豊川町に移って開業したが、大正13年心臓麻痺にて、63才を期に世を去った。

(9) **158 桐淵義忠**
(明治33.2.1～昭和30.8.27、1900～1955)

父を高橋京蔵といい、桐淵武十郎の娘さんの養子として迎えられた。大正14年3月東京医専を卒業し、一族の桐淵鏡次に師事して眼科を学んだ。昭和5年岡崎市伝馬町へ帰って眼科を開いたが、昭和12年支那事変

に応召し、昭和16年再応召中、満州にて脳出血発作にて倒れて送還された。

その後自宅で診療する程になっていたが、昭和30年8月27日、脳出血の再発にて、55才を一期に不帰の客となった。

(10) **三島あさ子** (昭和7.2.2、1932生) は、桐淵義忠の娘、昭和30年名古屋市大医学部を卒業した年に父を亡くしたので、同32年亡父義忠の後を継ぐために、岡崎市唐沢町に帰り、桐淵眼科を再興した。翌年の昭和33年、皮科専攻の三島力と結婚し、三島姓に改めた。

(11) 桐淵惟義 (昭和9.8.4、1934生) は、桐淵義忠の長男で、前記あき子の弟である。昭和34年名大医学部を卒業すると、小島克教授の眼科へ入り、現在大学院在学中。

(12) 桐淵正玄は、桐淵道齊の実弟で、横浜市神奈川区青木町で桐淵眼科を開いた。その長男正は、愛知県幡豆郡西尾町天王にて眼科を開業しておったが、その後の消息はよく分らないのが残念である。

(桐淵眼科の史料は、光智、楨一郎両氏の熱心なる) 協力で負うところが多かった。

159 近藤成美

(明治2.11~歿年不詳)

徳島県那賀郡大野村の人。酒造を業とする近藤増治の次男として生る。明治13年(1880) 徳島市に出て岡本斯之につき漢学を、速水敏について数学を学んだ。明治19年大阪に出て、翌20年9月大阪医学校に入り、明治25年9月卒業した。卒業と同時に紀州に赴いて開業した。

明治26年2月、母校の大阪医学校へ招かれて、最初外科の助手となり、同年11月より眼科医員を命ぜられた。このときの眼科主任は新進の今居真吉教諭であった。明治28年5月からは、大阪日赤病院看護婦養成所教員に転じて、梅田駅へ送還される日清役の傷病兵の救護にあたった。

明治30年2月、日赤の任務を終えたので、再び、大阪医学校へ復職し、助教諭を拝命した。そして明治30年5月より同32年6月まで、今居教諭の洋行中の眼科医長代理を無事務めて退職し、大阪東区瓦町に眼科を開業した。

当時の医学士に対する世人の評価は大したものので、今居医学士の外遊の留守中、近藤が講義をしようとするに、「われわれは学士でない者に講義は聞かない」と言って生徒が大騒ぎをし、同盟休校にまでなろうとしたので、学校側は止むなく、近藤を助教諭に昇進せしめて、やっと生徒を宥めたという話が残っている。

160 喜多山才治

(嘉永6年—不詳)

近江国阪田郡加納村に生る。父を川井玄益といひ代々の医家で、その次男として生れた。明治12年、長浜中学を卒業して、翌13年県立医学校へ入学したが、同14年上京して東大の別科に入り、18年そこを卒業、すぐ彦根藩士の喜多山氏を嗣いだ。

間もなく陸軍へ入って軍医となったが、明治21年には鹿兒島病院副院長に聘せられた。同23年これを辞して大阪に出て、北区老松町3丁目に眼科の門戸を張った。その時が38才であったが、歿年不詳

(1) 161 楠木志能夫

(明治6~昭和28、1873~1953)

長崎県大村在の人。明治32年、熊本の第五高等学校医学部を卒業し、直ちに上京して、東大選科に入って河本教授に師事して眼科を修め、郷里大村市に帰って開業した。この楠木眼科を継承したのが(2)渡辺涉(明治30年生)で、この人も大村市の生れ、大正10年岡山医専を卒業して、藤田秀太郎教授について眼科を修めた。渡辺は斯くて楠木眼科の老舗を守ったのであるが、その中に実子鉄郎が養子となって名実共に楠木眼科を嗣いだ。

(3) 楠木鉄郎(大正15年、1926生)は、

前記渡辺涉の実子。昭和25年阪大専門部を卒業し、直ちに眼科の宇山教授の門に入って研究し、昭和30年「水晶体の燐代謝」の論文にて阪大の学位を得た。天王寺病院、次いで松原市立病院の眼科医長を経て、昭和39年7月、大村に帰って父のあとを継いだ。これより先き、楠木志能夫の養嗣子となって楠木姓に改めた。

162 木下行道

(安政4.12.13~昭和19.1.2、1857~1944)

和歌山県伊都郡笠田町東1490で、木下六次良(文久3.6.2歿)、母オセン(明治6.9.21歿)

